

皆さん。こんにちは。文化財課の児玉です。

7月17日、トルコで開かれたユネスコ世界遺産委員会で、フランス人の建築家ル・コルビュジエが設計した「国立西洋美術館」（東京・昭和34年〈1959〉完成）の世界文化遺産への登録が決まりました。弘前市には弘前市役所や弘前市立博物館など、コルビュジエのもとで修業した前川國男の建築作品（いずれも昭和期）が残されています。

青森市を代表する建築の一つに、明治41年（1908）11月に建てられた旧青森大林区署庁舎、つまり今の森林博物館が挙げられます。ルネサンス式洋風建築の2階建て、ミントグリーンの板張りの外壁を特徴とする建物ですが、これまで設計者については、外国人との説や建築を請負った成田文吉（成文組創業者）との説もありましたが、一般には農商務省山林局（現農林水産省林野庁）が担当したことになっていました。

つい先日、森林博物館の常設展示室の展示替の関係で、津軽森林鉄道に関する過去の新聞記事を調査していたところ、偶然なのですが、明治41年2月20日付『東奥日報』の「新築中の青森大林区署」と題する図版記事の中に、設計者「久留正道」の記載を見つけました。

この記事に記されていた<sup>くるまさみち</sup>久留正道は、安政2年（1885）に江戸に生まれ、工部大学校造家学科（現東京大学工学部建築学科）で鹿鳴館（明治16年）を設計したジョサイア・コンドル（英国より招へい）に建築を学んでいます。その後、工部省や内務省を経て、文部省に所属し各地の高等中学校等の建築に従事しました。また、学校建築の標準となった明治28年刊の『学校建築図説明及設計大要』は久留の著作といわれています。



久留正道  
（「第5回内国勸業博覧会  
審査会列伝」より転載）

久留が設計や工事監理に関わった建築作品には、東京音楽学校奏楽堂（明治23年）、シカゴ博覧会日本館「鳳凰殿」（明治26年）、京都府庁（明治37年）、帝国図書館（明治39年）など多数あります。

文部省の久留が、なぜ他省の施設の設計を担当したのかはわかりませんが、久留が洋風木造建築物の技法を全国普及に貢献した一人であることや、他省あるいは国と地方自治体の垣根をこえて設計等に関わっていた実績があることなどから、農商務省山林局管轄であった青森大林区署の設計への関与も可能であったのではないのでしょうか。

青森市内の明治以降の洋風建築物は、明治43年の青森大火や昭和20年の青森大空襲等により現存する歴史的建造物が非常に少ないのですが、このような中で今回確認した『東奥日報』の記事は、森林博物館の文化財的価値を高めるだけでなく、日本の建築史を考える上でも意義があるものと考えます。